

その使い方・・・今すぐ確認！

ステロイド治療薬

点眼薬・軟膏・全身投与(内服など)



漫然と長期間※の点眼

アレルギー性結膜炎などの治療でステロイド点眼薬の使用により眼圧が上昇する事があります。自己判断で漫然と使用せず、**眼科を受診しましょう。**



まぶたや顔面への塗布

ステロイド軟膏をまぶたや顔に塗ったり、全身に投与(内服など)すると、眼圧が上昇する事があります。これらの処置を行う際には、**眼科を受診しましょう。**

眼圧上昇は緑内障になるリスクがあります

自覚症状がなく
気付かない

ステロイドの使用は、**眼圧上昇**のリスクがあります。
ステロイド点眼薬の場合、成人の約30%、小児ではさらに高頻度で**眼圧上昇**が発生しますが、多くの場合**自覚症状がありません**。点眼薬に限らず、全身投与(内服など)や軟膏の長期使用※でもリスクが高まるので、**定期的な眼圧測定が重要**です。放置すると**緑内障を発症するリスク**があります。

緑内障とは

緑内障の症状は、徐々に視野が狭くなったり、視野の一部が欠けたりします。しかし、進行が非常にゆっくりなため、**自覚症状がない**ことが多く、気づいた時には症状がかなり進行していることもあります。また、一度視神経が障害を受けると元の状態に回復することはありません。

※ 短期間・少量でも反応する場合があります。



医療関係者の皆様へ

ステロイド治療薬による眼圧上昇が報告されています

厚生労働省	<p>重篤副作用疾患別対応マニュアル 緑内障 2009年5月(2019年9月改定)</p> <ul style="list-style-type: none">副腎皮質ステロイド薬であれば種類や投与方法にかかわらず眼圧上昇を来しうる副腎皮質ステロイド薬を使用している患者には定期的眼科受診をすすめるべきである。必要な検査として細隙灯顕微鏡検査、眼圧検査、隅角検査、眼底検査、視野検査などがある。顔面や眼瞼、さらには遠隔部の皮膚への軟膏など外用薬の投与でも、眼圧を上昇させるのに十分な量が吸収され眼組織に到達し、眼圧上昇を来す副腎皮質ステロイド薬の全身投与でも眼局所投与と比較し影響は少ないものの眼圧が上昇する可能性がある。0.1%デキサメタゾン点眼液投与により正常者の5～6%に高度、30%前後で中等度の眼圧上昇を認めるとされている。眼圧、眼底や視野障害の程度に応じて、抗緑内障薬の点眼や炭酸脱水酵素阻害薬の内服を行う。薬物療法が奏効しない場合は、レーザー線維柱帯形成術または線維柱帯切開術や線維柱帯切除術などの手術療法を行う。
臨床眼科	<p>ステロイドレスポンダーの臨床的特徴 臨床眼科 62(9):1519-1522, 2008</p> <p>ステロイド投与では、点眼だけでなく全身投与でも眼圧が上昇することがあり、かつ長期の経過観察が必要である。</p>
鼻アレルギー診療ガイドライン作成委員会	<p>鼻アレルギー診療ガイドライン—通年性鼻炎と花粉症—2016年版(改訂第8版) 2015年12月</p> <p>アレルギー性結膜炎の重症例に用いられるステロイド薬は点眼の場合、眼圧上昇から緑内障へと危険な副作用を起こすことがあり、特に小児では頻度が高い。重症度を見極め、ステロイドの種類、点眼回数を決め、漫然と長期に高濃度のステロイド点眼薬を継続して使用することを避けなければならない。</p>
日本皮膚科学会ガイドライン	<p>アトピー性皮膚炎診療ガイドライン 2024 日皮会誌:134(11), 2741-2843, 2024</p> <ul style="list-style-type: none">ステロイド外用薬による緑内障の症例報告は多く、ランクが高いステロイドを用いたり、塗布回数が多かったり、塗布期間が長くなったりすると、リスクが高くなる。特に眼周囲に使用した場合、眼圧上昇や緑内障のリスクを高める。ステロイド点眼は眼圧上昇の副作用があるために眼科での治療が必須である。